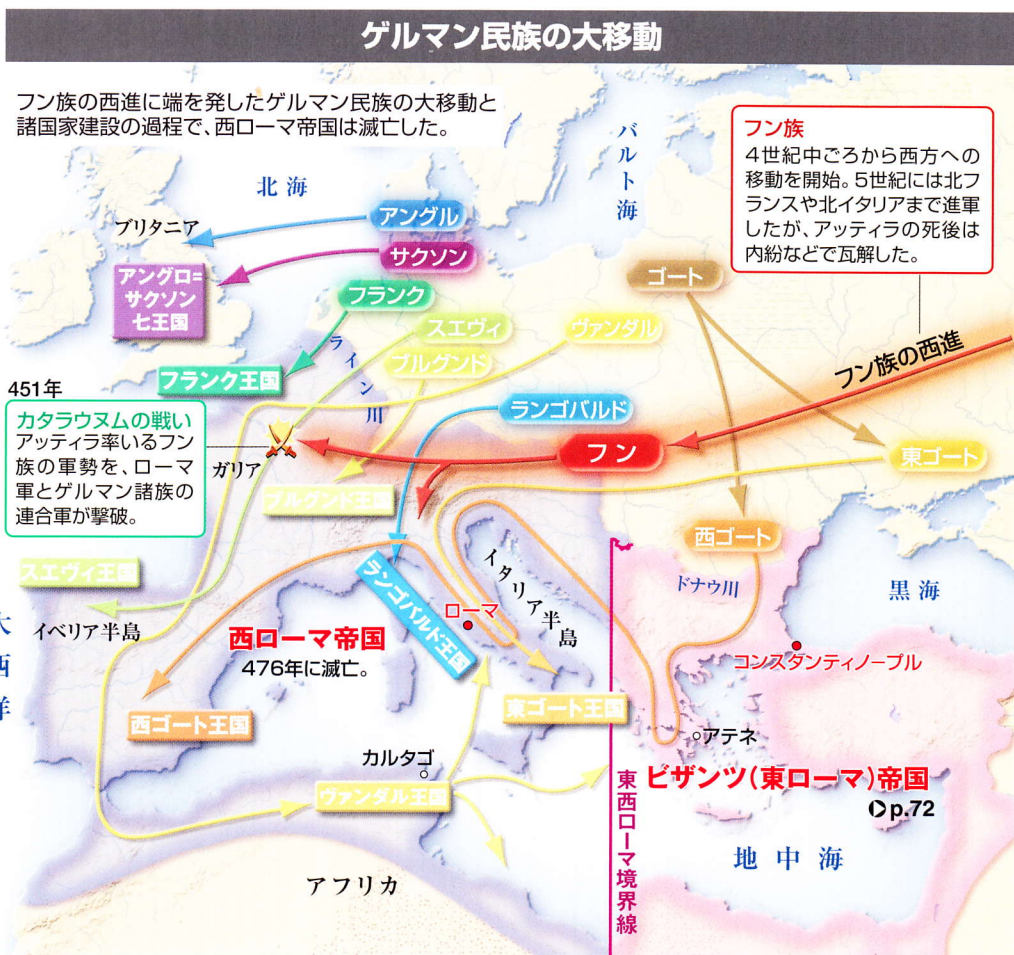


ゲルマン民族の大移動で 終焉した西ローマ帝国



ゲルマン民族が
領内に移動して
西ローマ帝国は
滅亡した。

フン族の西進により ゲルマン民族の移動が加速

西ローマ帝国を滅亡に導き、中世ヨーロッパ世界の幕を開ける契機となったのがゲルマン民族の大移動である。

古代ローマの歴史家タキトゥスの『ゲルマニア』によると、バルト海沿岸地方を原住地としていたゲルマン民族は、すでに紀元前後にはライン川、ドナウ川の北方にまで居住地を拡大していたとされている。その一部は、3世紀ごろになると、人口増加による土地不足から、傭兵やコロヌス(小作人)としてローマ帝国(P 30参照)内に移住しはじめていた。

この動きを一気に加速させたのが、北アジアの遊牧騎馬民族であるフン族の西進であった。375年、フン族は黒海北岸に侵入し、東ゴート族を支配下に置くとともに、西ゴート族も圧迫。翌年西ゴート族はドナウ川を越え、ローマ帝国内に移動した。

ゲルマン諸国家の成立と 西ローマ帝国の滅亡

移動した西ゴート族は、やがてイタリア半島に進出。西ローマ帝国はイタリア本土防衛のため、国境守備にしていた軍隊を呼び戻した。しかし、これによって国境地帯が手薄になり、多くのゲルマン諸部

族が次々にローマ帝国内に移動してくることとなった。この時期に大移動を行った民族には、のちに大王国を築いたフランク族のほか、北アフリカに建国したヴァンダル族、北イタリアに建国したランゴバルド族、ブリタニアに建国したアングル族、サクソン族などがある。

一方、相次ぐゲルマン諸国家の成立により弱体化した西ローマ帝国は、476年、ゲルマン人傭兵隊長のオドアケルによって皇帝ロムルス・アウグストゥルスが退位させられ、滅亡した。

フン族はどこから来たか

ゲルマン民族大移動のきっかけとなったフン族の由来として最も有力視されているのは、モンゴル高原を中心に活躍し、中国の秦や漢を脅かした遊牧騎馬民族、匈奴の子孫だといわれている。

匈奴は後48年に南北に分かれ、南匈奴は次第に中国化した。北匈奴はしばしば中国に侵入していた。しかし、後91年には後漢・南匈奴の連合軍に敗れ、モンゴル高原における匈奴の国家は滅亡。その残党の一部が西方に逃れ、フン族になったといわれている。

この説の拠り所としては、両者の生活様式や風習が同じであること、匈奴の西方移動とフン族が中央アジアに出現した時期が一致すること、さらには北魏の歴史を記した『魏書』の中に、アッティラの子孫が「匈奴」と記されていることも根拠となっている。また、匈奴の古い中国語読み「フンヌ」とフンが同じであることはほぼ間違いないとみられている。

Key Word

ケルト人

ゲルマン民族が移動してくる前、西ヨーロッパ一帯に住んでいたのはケルト人である。現在ではアイルランド、スコットランド、ウェールズなどに居住するのみであるが、前4～前2世紀ごろにはイベリア半島、ブリテン島から小アジアに至る広大なエリアで活動していた。鉄製武器の製造技術に優れ、ケルト神話はのちのヨーロッパ人の精神に大きな影響を与えている。